

自閉スペクトラム症の自己生成に立ち会う他者に関する考察

山 本 知 香

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻
〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本稿の目的は、自閉スペクトラム症 (ASD) の自己生成に立ち会う他者について、音楽療法実践の文脈においた考察を試みることである。自己生成に立ち会うためには、ASD の自他未分の世界を共に生きることが求められる。しかし、これまで、ASD の自己の弱さが、自他未分の世界からの自己生成や、他者のあり方にどう影響するのか、明らかにされてこなかった。そこで、他者からの志向性のレセプターである〈 ϕ 〉の概念を参照し、実践場面を考察した。結果として、自己と他者が同じ「大地」に立ち上がることが、自己生成にとって重要な意味を持つこと、そのために、〈 ϕ 〉に向けた音楽の発信が助けになること、他者として関わる側が自己の輪郭をゆるめる必要があることが明らかになった。

1. 問題の所在 弱さを抱えた ASD の自己生成をどのように捉えるか

1.1. ASD の自己の弱さについて

自閉スペクトラム症 (ASD) は、自己に弱さを抱えるとされる。ASD¹⁾が自他未分の世界を生き自己に弱さを抱えることは、精神病理学や心理学の知見等によって指摘されてきた。後に見るように、たとえば精神病理学者の内海 (2015) は、ASD では他者からの志向性のレセプターである〈 ϕ 〉が未形成であるために自己が立ち上がりにくいことを指摘している。発達心理学の文脈では、他者との関わりの中で自己感が見出されていく発達のプロセス (Stern, 1985/1989) を踏まえ、ASD が定型者とは異なるルートで自己感の形成を辿る可能性や、その歩みに伴う困難を描いた論考がある (山崎, 2015)。また、ASD 当事者による自伝 (Gerland, 1997/2000; Williams, 1992/2000) や当事者研究 (綾屋, 2008) などにおいても、ASD がいかに自他未分の世界を生き、自己の弱さに由来する苦しみを経験しているかが記述されている。

ただ、自己の弱さといっても、その意味する状態は様々であろう。そもそも、自己とは何か、という問いは哲学的にも大きなテーマであり、本稿で扱いきることはできない。以下では、ASD の自己について、まず「この私」、すなわち「自分は自分であるということ」の感覚の持ちにくさという側面から考察を始める。

「自分は自分であるということ」は、定型者にとっては改めて考えるまでもなく当然のことかもしれない。2, 3 歳頃のいわゆるイヤイヤ期の時期を経て自我の感覚が芽生えると、他の誰とも違う人格を持った一人の人間として、その後の人生を歩み始める。青年期には、「本当の自分とは?」「私は一体何者なのか?」などと考え始め、アイデンティティの確立を巡り危機を迎えることもあるだろう。しかし、よほど病的な事態でない限り、自分探しをして苦悩しているのが他の誰でもない「この私」であり、「この私」が探しているのは私にとつての自分だ、という自己の確信は揺らがない。ここに、自己の二重性を読み取ることができる。

自己には、主体 (能動的行為者・知者) として

の自己“I-self”と、対象（被知者）としての自己“Me-self”という二側面がある（能智・香川ら，2018）。「知るものとしての自己」と「知られるものとしての自己」の二重性である。先の例で言えば、アイデンティティ確立の時期に採られる本当の自分は「対象としての自己＝知られる自己」であり、それを探しているのが「主体としての自己＝知る自己」である。本当の自分を巡る悩みがいくら深くとも、自分を探しているのは私であるという構図が崩れないのは、定型者の多くが主体としての自己の輪郭をはっきりと備えているからであろう。

とはいえ、何かに没入しているとき、文字通り無我夢中に何かにのめり込んでいるとき、一時的に自己の感覚が消えることはある。もっといえば、そもそも「自己はつねに居合わせるものではなく」、「何かに対する応答として成立するものであり、言い換えれば存在するものではなく、生成するものである」とも言われる（内海，2012，pp. 40-41）。消えているところからその都度自己を立ち上げ、「この私」の我に返ることができるのは、主体としての自己が、他の誰でもなく、「自分は自分であるということ」の根拠のようなものとして働いているからである。

ところで、ASDでは、この他の誰でもない「自分は自分であるということ」の根拠のようなものとして働く自己に弱さを抱えているようだ。ASD当事者である綾屋（2010）は、周囲の人たちのキャラ（キャラクター：人柄）が侵入してくる苦しみについて述べている。本来の自分が、侵入してきた他者のキャラに推しつぶされそうになるというのである。定型者も、多かれ少なかれ、どのような対人関係の場に身を置かにより色々なキャラを使い分けている。場合によっては、相手のペースに巻き込まれ本来の自分の呼吸ができず、息苦しさを覚えることもあるかもしれない。しかし、先にも述べたように「その苦しさを覚えているのが自分である」という感覚までもが崩れることはないだろう。綾屋自身も、他者のキャラの侵入によって本来の自分のキャラが消えてしまうというわけではないという。ただ、その都度の経験を「この私」のもとに束ねるキャラよりも高次の

「司令塔」（綾屋，2008，p. 110）がうまく機能していないために、他者からの侵入による苦しみは定型者と比して高いといえるだろう。綾屋（2010）は、「『私』という統一感を持った『存在の輪郭』と呼べるようなものまでも、すぐに見失ってしまいがちになる」と述べている（p. 18）。ちなみに、「司令塔」がうまく機能しないことは、自己の問題に限らず、ASDの感覚をまとめあげることの困難とも関わっており、「中枢の統合の弱さ」（Frith，1989/1991，p. 173）の議論とも関連して、ASDの障害を理解する仮説として知られている。

さて、ASDの自己について内海（2015）は、自らの臨床例からASDの被影響性の高さについて紹介し、「あえて自己に『重さ』のようなものを想定するなら、ASDの自己質量は軽い」と表現する（p. 138）。容易に他者に振り回されてしまう自己のあり方は、往々にして社会生活を送る上での困難や苦しみの元となることが想像される。

しかし、たとえばASD当事者であるウィリアムズ（Williams，1998/2009）は、自分は自分としてありながら他者のことも同時に感覚する難しさや、真の自己をめぐる苦悩を生々しく描く一方で、仮のキャラクターを利用することで、ある時期の対人関係をやり過ごしていたこともまた記している。広沢（2013）は、精神科医としての自身の臨床経験から、頭の中がタッチパネルになっていて、必要なときに頭の中にある必要なアイコンをタッチしてそこに開かれる世界を生き、また別のアイコンにタッチすると別の世界が開かれ、そこを生きるのだ、というある患者の発言を取り上げ、高機能広汎性発達障害（PDD）者のタッチパネル状の自己-世界感を「PDD型自己」と呼ぶ。PDD者は「複数の自己-世界」をもち、そのときその場にふさわしい自己を生きるというあり方をいわば戦略的に生きているというわけである。自分というもののなさは認めつつも、「複数の自己-世界」をもつPDD者のあり方そのものを、広沢は必ずしも「弱さ」とは見做していないようだ。小説家の平野（2012）も、人間をそれ以上分割できない「個人（individual）」と捉えることに対し、対人関係ごとに異なる人格を生きる「分人（dividual）」という概念による人間の捉え方を提唱し

ている。ASD について述べているわけではないが、複数の自己を生きることには積極的な意味を見ようとしているという点では、広沢の捉え方と通じるところがある。

これらの議論を踏まえると、「自分は自分であるということ」の感覚を持ちにくい自己のあり方を端的に「弱さ」と呼ぶこと、その「弱さ」にアプローチして「この私」の形成へと働きかけようとするには、妥当性が問われる可能性が残されていることがわかる。しかし、現代人として現代西欧型文明を生きるには、という前置き付きではあるが、「他人ではないところの自己であること」の感覚が成立していなければ生きていくことは困難なのではないかという指摘（木村・市川ら、2017, p. 311）があるように、複数の自己のあり方を「この私」の経験のもとに束ね、「自分は自分であるということ」を確かに感じられることは、ASD の生きやすさにつながる場合があるのではないだろうか。そもそも、ASD 当事者はどのように考えているのだろうか。

少なくとも、音楽療法士である筆者自身の経験として、ASD の子どもの自己生成の場に立ち会い自他の出会いを感じることは、互いにとって喜びの感覚を伴うものであり、その後の子どもとの関係性にとって転機となるような出来事であった（山本、2016a・2016b）。その出会いは、子どもの自由な心の動きを重んじ、自己性²⁾の育ちへアプローチしようとする関係発達論的な音楽療法（山本、2023）の実践の中で、子どもと無理なく共に居ることをガイドラインに過ぎすうちにふと起こったのであり、決してこちらからの一方的な働きかけの結果として起こったのではないといえる。筆者は、このような実践経験を重ねることで、ASD の子どもによっては、「この私」の自己生成に関わるイベントを密かに待ち望んでいることもあるのではないかと考えるようになった。もちろん、「この私」の経験を重ね、自己の輪郭を携えていくことに育ちの喜びだけを見出すわけにはいかない。自己の輪郭が際立つに伴い、対人面に新たな難しさを抱えるかもしれない。そこは丁寧なフォローが必要であろう。また、「この私」の経験へとアプローチしようすることは、たとえば

先ほどの「PDD 型自己」のように、ASD 者がそれぞれに生きている現状の自己のあり方を否定するものでないことも言い添えておく。

1.2. 本稿の目的 —— ASD の自己生成を可能にする他者と音楽のありようについて明らかにする

ところで、筆者が過去に経験した ASD の子どもとの出会いは、自他未分の状態から自己と他者が立ち上がってくるまさにそのときのできごとであった。それは、「あいだ」という根源的な位相における自他の出会いの場面であると考えられた（木村、2005）。しかし、ASD の子どもの自己の弱さが、その出会いにどのように関係しているのかという点についての考察は、手つかずのまま残されている。

そこで以下では、筆者自身の事例をもとに、弱さを抱えた ASD の自己生成へ立ち会うとはどのようなことなのか、音楽療法実践の文脈における考察を試みることにする。本稿を貫くのは、具体的な他者として ASD の自己の弱さにどのようにつき合うことができるだろうか、という実践的な関心である。

ここで、以下のような問いが浮かぶ。様々な感覚が、いかにして「この私」のものとしてまとめられるのか。「この私」の根拠として働く主体としての自己とは、いかなるものなのか。またそれは、対象としての自己とはどのように関わるのか。自己の形成や育ちという観点からみたとき、ASD はどのようなプロセスを辿るのか。これらの問いに答えるためには、やはり自己をめぐる壮大な議論の整理が求められるが、先にも述べた通り、それには改めて取り組まざるを得ない。ここでは、実践的な観点に絞りたい。「この私」の自己生成について、「象徴的、ないし社会的な個体化」（内海、2015, p. 58）に向かう劇的な自己の目覚めの場面を扱うのではなく、そのもっと手前のところに焦点をあてる。「象徴的、ないし社会的な個体」としてそれを自覚する自己へといずれ結晶化するであろう自己の発端のようなものが、何かに対する応答として生成すること、それを自己生成と呼び、その自己生成を可能にする他者と音楽のあり

ようについて明らかにすることを目的とする。

2. ASDの自己をめぐる、実践に基づく二つの論考

ASDの自己を主題にした療育や心理療法の中心から、山崎(2015)と藤巻(2020)の論考について紹介する。いずれも、自らが実践者であり研究者であるという立場によるもので、ASDの自己感の形成や主体の成立にはASDの体験世界へ他者が関係する必要があると述べている点で、本稿の関心に近い。

2.1. ASDの自己感の形成について

山崎は、家庭や学童保育という場で、養育者や支援者との関係の中でASDの子どもがいかにか自己感を形成していくかを、臨場感のあるエピソードと共に紹介している。Stern(1985/1989)による自己感の理論を下敷きにしつつ、周囲との身体的なつながりを欠いた状態にあるASDの子どもに、まず原初的な自己感として「『自らなす』自己感」を想定した。これは、間主観性による養育者との通じ合いによらない世界からの帰結としての「独特の自己感、定型発達の中核的自己感とはその構造を異にする自己感」である。その後、人に向かうことともものに向かうことが同列ではあるが、「行為の主体としての自己感」が生まれ、それを基盤に他者と「共にある」者としての自己感が芽生えるという。そして、この「共にある」体験の意義が、その後の自己感の形成を支えている(p.230)。

ASDの子どもへの細やかな配慮に裏付けされた、感動的ともいえる自己感の育ちのエピソードを読む限りでは、山崎の事例に登場する養育者や支援者も、「共にある」状態の実現のために、実際には自らの自己のありようを微調整しつつ自己生成の場に参入していたのではないかと推察される。しかし、ASDの子どもの自己感の形成という大きな発達のストーリーの手前のところでのような自己生成の瞬間があったのかについては、主題的には論じられていない。

2.2. 自他未分(「地続きの状態」)からの自己生成について

次に、臨床心理士である藤巻(2020)の論考を追っていき。自身が実践したプレイセラピーの事例を厚く記述し、膨大な理論的背景に依拠する考察を展開している。藤巻は、ASDが「自-他」の区別などのところにおける「二」の構造を獲得するために、「二」以前の自他未分の世界で展開されるプレイセラピーの治療的可能性を指摘し、「地べた意識」という治療者の意識過程について論じている。「地べた意識」とは、子どもの体験世界に沿うことで、未分化な意識状態に入り込むような治療者の意識の廻行のことである。

逆説的ではあるが、ASDの世界に「二」が現れるためには、まず地続きの世界に入り込むことが必要であると藤巻はいう。いったん地続きになることで、そこに生じる切れ目や響き合いという出来事に伴って起こる「二」の成立が可能になるという。そして、「自閉の世界に共に入り込むような『地べた意識』というあり方は、自閉症児を脅かすことなく内側から働きかけるのに有効である」(p.133)と述べる。

では、いかにして「地べた意識」は可能になるのだろうか。藤巻は、「心理療法の治療構造という気密性の高い器に、幼児や発達障害児など未分化な体験世界を生きている子どもと共に入ることで、治療者も未分化な意識状態になることは、ごく自然なことであろう」(p.77)とし、自他の境界や人と物の区別もないようなある治療者の体験を例に、「このような治療者側の未分化な意識体験は、幼児や発達障害児とのプレイセラピーの記述に散見する」という。しかし、ASDの地続きの世界に入り込むということは、そのようにスムーズに実現できるものなのだろうか。青木ら(2015)が、自閉症だけをスペクトラムと捉えるのではなく、定型者から自閉症までを含めた「発達スペクトラム」という概念を提出したことを紹介する藤巻は、ASDの体験を異質なものではなく、定型者という新生児期のような「原初的な体験様式のまま知的発達を遂げた存在」としてASDを捉えている(p.45)。それゆえ、「地べた意識」を「退行した意識状態」とであると表現する

(p. 78).

本稿では、自一他という「二」の成立を考える際に、地続きの世界にまずは入り込むという点で藤巻の論に同意しつつ、この一点においてのみ、微妙に異なる立場をとる。ASDは、自己に弱さを抱えている。それゆえ、ASDと地続きの世界に入り込むことには、単に原初的な感じ方へ遡行・退行するのとは違う、独特の態度が必要になると考える。

そこで以下では、まずASDの自己の弱さについて、内海(2015)による〈 ϕ 〉という概念を基軸に改めて整理し、筆者自身の音楽療法実践の事例から、ASDとの地続きの世界に入ろうとするときの独特の態度について論じてみたい。

3. 〈 ϕ 〉から考えるASDの自己の弱さ

3.1. 他者からの志向性のレセプター 〈 ϕ 〉

内海(2015)は、ASDの精神病理は、ミニマムに提示すると「他者からの志向性に対して応答しないこと」であるとする。その応答によって立ち上がるのがまさに「自己」であるという。そのため、「最初から自己を想定しては、ASDの世界へアプローチする鍵は与えられない」とする(p. 5)。この考えの下敷きは、村上(2008)の定式化した「視線触発」という受動のベクトルである。「視線」ではあるが視覚に限らず、聴覚や触覚にも認められる。とはいえ、「他者のまなざしが眼球という形態に還元されないように」、感性的体験(=知覚)とは異なる次元にある。それは「私が認識するのに先立ち、気がついたときにはすでに到来している」(p. 46)。他者のまなざしが指し示してくるのは「この私」であり、まなざしによって触発されるのが「自己」である。そのはじまりが、生後9ヶ月頃からの「ひとみしり」にみられる。生まれ落ちたときから、赤ちゃんは周囲からのまなざしに曝されているが、初めはそれに気がつかない。反応はするが、反射的なものである。それが、しかるべきときがくると、ふとまなざしに気づき、自分にめざめるのだという。しかし、他者のまなざしに気づき、自己に覚醒したとき、まなざしはすでに立ち去っている。最初の

ひとみしりの場面を、われわれは覚えておらず、めざめた自己は、他者が自分を立ち上げてくれたことを知らない。しかし、そのとき、他者のまなざしが置いていった痕跡が残る。内海は、この痕跡を空集合に寄せて〈 ϕ 〉という記号で示した。

〈 ϕ 〉は、「この私」ということ以外の何もかも示さない。「他者からの志向性に共鳴するレセプター」であり、自己の起源にあって、「経験に先立ち、経験の条件となっている」(p. 53)。そして、この〈 ϕ 〉が未形成にとどまるのが、ASDの精神病理の出発点であるとしている。定型者の場合、まなざしに代表されるような他者からの志向性を受けると、痕跡である〈 ϕ 〉が一瞬刺激されて、そのたびにあらためて自己を意識させられるが、ASDの場合は、そこから自己が立ち上がらない、と内海はいう。

3.2. 〈 ϕ 〉に志向性を送るのは誰なのか

内海は、〈 ϕ 〉の未形成からくるASDの困難をどのように支えていけばよいか、自らの臨床例をもとにしたヒントを提示している。しかし、〈 ϕ 〉の未形成ということそれ自体との向き合い方については、ほとんど触れていない。そこで、ASDの自己の弱さについて、〈 ϕ 〉を合わせることで本稿の問いを新たに書き換えることができる。〈 ϕ 〉が、「他者からの志向性に共鳴するレセプター」であり、それがASDにないのではなく未形成なのであれば、その未形成なレセプター〈 ϕ 〉に合った志向性を送ることで、自己の感覚に何かしらの肯定的な変化を起こすことはできないのだろうか。つまり、〈 ϕ 〉の形成が他者からの志向性とセットであるというところに注目しながら、〈 ϕ 〉が刺激されることによる自己生成の場面を考えるということである。では、未形成なレセプター〈 ϕ 〉に合った志向性とはどのようなことなのか。また、どのような変化の可能性があるのでなか。以下では、筆者が音楽療法士として関わったASDの子どもとのエピソードから考察を進めていきたい。

4. ある音楽療法実践から

ここからは、音楽療法士としての筆者の経験を

記した既出のエピソードと考察（山本，2021）を一部改変しながら引用し、新たな考察を追加する。そのことによって浮かび上がってくるのは、子どもの自己生成の場となる地続きの世界で「共に居る」状態を実現するため、音や音楽を発信しつつ子どもの心の状態を受信しようとする他者としての音楽療法士のあり方である。

エピソードの提示や考察については、「エピソード記述」（鯨岡，2005）の方法論に則って行った。エピソード記述とは、従来の客観主義的な発達研究への違和感から、「研究者の関心や志向から『真の問い』が発せられ、その解明に向かって研究が開始されるのでなければならない」と考えた鯨岡（1999，p.105）によって考案された、現象学的アプローチによって体験の意味を掘り下げる質的研究の一つである。エピソード記述の特徴は、「私」を主語にした一人称の記述によって、『共に生きる』という主題、つまり、人と人との接面で何が生じているかを明らかにしようという主題」（鯨岡，2013，p.36）に迫ろうとするところにある。

4.1. 本稿における音楽療法の概略

音楽療法には様々な立場があるが、ここでの音楽療法は、子どもが音楽療法士との関係の中で自由に表現することで子どもの心を育てようとする、関係発達論的な考えに基づいた実践である（山本，2023）。何らかの行動能力の獲得を目指すのではなく、子どもが自分の呼吸のペースを大切にしつつ音楽療法士と一緒に伸び伸びと過ごすことを何よりも大事にしており、音楽療法の時間が、ほっとしたり元気が出たりすることにつながるよう期待している。この実践の背景には、カール・ロジャーズの来談者中心療法の考えをもとに、自閉症の子どもの心理療法に音楽を取り入れた、山松質文からの影響がある³⁾。山松は、日本の音楽療法の草分け的な存在であり（後藤，2007）、わだかまりのない人間関係の中で、子どもが自由に自己表現することが、子どもの心を育てると考えた（山松，1997）。「決してクライアントの先廻りをしないこと、動き（心の動き）を封じないこと、クライアントの自由を奪わないこと」を重視し、

そのために音楽療法にかかわる人自身が、「自由であること、自然体であること、取り繕わないこと、頭で考えるのではなく、心と体で感ずること」が肝要であると説く（山松，1997，p.2）。プログラムを事前に準備することはなく、やってきた子どもがそのときその場でやりたいことをする。音楽療法士である筆者は、ピアノや打楽器を鳴らしたり、歌いかけたりしながら、子どもの過ごし方、やりたいことの実現を、音や音楽で支えていく。

音や音楽、楽器の存在は、子どもや音楽療法士の表現手段となることもあれば、ちょうどいいワンクッションとなって子どもと音楽療法士との距離感を調整してくれたりもする。童謡やアニメソングなどの既成曲を使うこともあれば、その場の雰囲気ですぐ即興演奏をすることもあるが、いずれにしても、音楽体験そのものに子どもを導くことよりも、音楽の力を借りながら、お互いが無理なく共に過ごすことを重視している。

4.2. ある ASD 幼児、よしくんと音楽療法について

今から紹介するエピソードは、音楽療法を開始して間もない頃の、よしくん（当時3歳）との実践場面を描いたものである。よしくんは ASD の診断を受けている。具体的には、1回30分、月2回の個人セッションである。ある音楽教室の一部屋を借り、ピアノ、シンバル、ツリーチャイム、フロアタム、タンバリン、鈴、マラカス、ハンドベルなどの楽器を、よしくんがいつでも触れるように準備していた。ここからは、音楽療法士として筆者自身の経験を記述するため、筆者のことを「私」という一人称で記述する。

よしくんと出会った当初、とにかくとても可愛い子だな、という印象を持った。存在自体がまだフワフワしているような、柔らかな繊細さを感じさせる雰囲気に包まれていた。こちらからの働きかけには、全くもって何も返してこないこともあった。一方で、目も合い、内容は私にとって理解しにくいものではありつつも、にこやかに話しかけてきてくれることもあった。

エピソード：何がおもしろいかわからない

【背景】

4回目のセッションの日、よしくんは、ツリーチャイムを鳴らす、フロアタムを叩く、シンバルを回す、鈴を持つ、歩くなど、小刻みに当てを変えて、動いていました。そのなかでも、ツリーチャイムのことは、特に気になっているようでした。機嫌は良いようで、ときおり「アハハ」と声を出して笑っていましたが、どうして笑っているのか、私にはよくわかりません。私は、よしくんの動きや、楽器の音などを頼りに、ピアノで弾き歌いします。しかし、たとえば、鈴を手にしたよしくんを見て「♪鈴を鳴らすよ、鈴を～」と歌い始めたときには、もうよしくんはツリーチャイムのところに移動しています。興味の移り変わりが早く、また、そのタイミングも私には唐突に感じられました。それぞれの楽器ごとに音楽をつけようとしても、私にとって自然だと感じる程度に、フレーズの長さをキープすることができません。そのため、うまく噛み合わず、ぎこちなくずれてしまいます。よしくんが動きや楽器を変えるたびに、私も同じように演奏する音楽を変えようとしていたことが、このずれをことさらに強調してしまっていたのかもしれない。

【エピソード】

触りかけた鈴を置いて、よしくんは、ツリーチャイムのところにやってきました。私は、歌詞をつけて歌うのはやめることにして、ピアノを弾くことに専念することにしました。流れの中で、なんとなく、よしくんがツリーチャイムを鳴らすときは、ドレミソラのメジャー・ペンタトニック・スケールでピアノを弾くことが、私の中でのゆるいパターンとなっていきます。

あるとき、ふとよしくんは腰をかがめ、暖簾をくぐるように、ツリーチャイムの下に頭を持っていきました。意外な動きに、「くぐってみたん？」と私は笑います。それに対して、よしくんは、チラッと視線を

返すのみです。自分の笑いが不自然に宙に浮いてしまい、ドキッとしました。

その後、シンバルやフロアタムのときには、同じスケールでも、ベースをソトラの繰り返しにしたり、拍感を出したりして変化をつけることで、それぞれの楽器のテーマ曲のようなものが、なんとなく出来上がっていきました。ですが、やはりどこかぎこちなさを感じていた私は、よしくんがツリーチャイムを鳴らしたときに、それまでのように即興的に演奏するのをやめ、なぜか「きらきらぼし」を弾き始めました。先ほどよしくんから返された視線にドキッとしたこともあり、その気まずさをなんとか埋めようとして、慌てたのかもしれませんが、いきなり既成曲が登場して唐突な印象を与えないよう、童謡らしさが際立つシンプルなコード進行を避け、おぼろげに続くような伴奏を心がけはしましたが⁴⁾、「きらきらぼし」は「きらきらぼし」です。おなじみのメロディーがいったん流れ始めると、曲の途中では演奏を止めにくく、よしくんのそのときその場での動きに、ピタッと寄り添っていくことが難しくなっていました。それどころか、フレーズの持つ、まとまりの力によって、よしくんの動きをつなぎとめる方向へ、誘導してしまう恐れもありました。

案の定、一度ツリーチャイムから離れかけたよしくんが、またすぐ戻ってくる、という動きを見せました。「あー、ほら。しまった…」と思いながらも、すぐには自分の手を止められずなおも弾き続けていると、よしくんは、今度はフロアタムへ向かいました。そこで、「きらきらぼし」の途中ながら、なんとか、先ほどまでのドレミソラの音階による音楽へ、演奏を戻せたのですが、それもつかの間。また、あっという間によしくんはツリーチャイムへ戻りました。そして私は、どうしてなのか、またしても「きらきらぼし」を弾いてしまうのでした。

しばらくして、歩き始めたよしくんが、

床に置かれた鈴を見つけ、「こっちにもあるなあ」と言いました。私は、「あったなあ!」と返事をして、嬉々としてピアノを弾くのをやめました。場をリセットするきっかけができたことに、密かにホッとしたのです。(山本, 2021, pp. 140-142)

よしくんと間に漂う居心地の悪さ、落ち着かなさ、気まずさのようなものをなんとかしたいと思いつつも、それがうまくいかず、焦る私の様子が描かれている。よしくんの動きに合わせてようとしつつも、こちなく即興的にピアノを弾いていた私は、よしくんがツリーチャイムを鳴らしたときになぜか「きらきらぼし」を弾き始めてしまう。よしくんは、すぐツリーチャイムから離れようとしたのだが、「きらきらぼし」の旋律に引き留められるかのように、ツリーチャイムの元へ戻ってきてしまう。私は、よしくんの自然な流れを遮ったように感じ、「しまった…」と反省する。

4.3. 当初の考察

この場面で私はよしくんの自然な流れを遮ったように感じ、「しまった…」と反省しているが、そもそもよしくんはあとき不快な様子を見せたわけではなく、「遮られた」、「引き留められた」と感じていたかどうかは定かではない。いや、おそらく何かを意識するまでもなく、「きらきらぼし」の旋律に身体が反応した、ということだったのではないか。それまでに私が弾いていたぎこちない即興演奏に比べて、「きらきらぼし」は、明瞭なまとまりを持った旋律（フレーズ）をもつ。そのことが、まだ続いている旋律の中（フレーズの途中）で自分の行為を変更する（ツリーチャイムをやめる）ことを不自然なこととして際立たせ、よしくんの身体が反応したのではないだろうか。ではなぜ、この場面で私は「しまった…」と感じたのか。既出の論考（山本, 2021）で展開した考察の要点は以下の通りである。

◆ここでの音楽療法は、音楽療法士が先廻りして子どもの自由を奪わないことを重視し、そのことによって子どもが自由に表現することが子どもの心を育てるという考えに基づいている。そのため、

よしくんに何かに「気づかせる」というこちらからリードするようなことをしたくなかった。まず、よしくんが無理せず自然に呼吸をし、安心してここに居られるようになってほしいと願っていた。もし何かに気づく場合には、よしくんが自ずから気づくことを実現したい。それがこの場でよしくんの自己性の育ちにとって大切だと考えているからである。

◆もちろん、よしくんがこの場で安心するためには、少なくとも一緒に居て悪くない相手であるという意味で、私のことに気がついてもらわなくてはならない。結局はうまくいかなかったが、あ那时的私が、ピアノを弾き、よしくんの動きを描こうとしていたのは、よしくんのしていることを受け止め、認めているよ、と伝えることで、少しでも安心につながれば、という思いがあった。また、自己性は自分一人で育てていけるわけではなく、他者（この場合は私）との関わり合いが必要である。そういう意味でも、私という存在への気づきは非常に重要である。ただ、よしくんとこのエピソードの時点では、「私はここにいるよ」とこちらから呼びかけて直接的に自己紹介するには、お互いの準備がまだできていないように感じていた。

自ずから気づくことがなぜ大事なのか。自己紹介するための準備とはどのようなことなのか。曖昧さが残る考察であった。以下では、先に述べた ϕ を参照することで、ASDの自己生成についての考察を一步先へと進めていく。

4.4. 立ち上がる自己の足元を問う——大地に根ざした自己生成について

ASDの療育等の現場では、周囲に興味を向けていないように振る舞うASD児に対して、外界や他者への気づきを促すような働きかけが行われることがある。確かに、何かに気づくことなしに、目的を持った療育を始めることは難しい。他者に気づくことから始まるコミュニケーションの展開もあるだろう。これは、他者からの志向性のレセプターとしての ϕ が未形成であるASD児に、鋭く強くまなざしを向け、触発することで、 ϕ を刺

激し、自己を呼び覚まそうとすることである。もちろん、無理やりアイコンタクトを取ったり、急に肩に手をかけて振り向かせたりするようなことを言っているのではない。しかし、それがうまく作用し「二」が生まれるのは、触発する他者の「地べた意識」がうまく働いているときでなくてはならないだろう。ASD児がそのとき生きている世界（自己意識の必要のない世界、地続きの世界）に、別のところ（地続きではないところ）から刺激を与えられることによって呼び覚まされる自己は、たとえ立ち上がったとしても、刺激を与える側の他者とは異質な世界に生成する自己である。

エピソードの中で、ツリーチャイムをくぐろうとしたよしくんに対し、私はよく理解もせず「くぐってみたん？」と声をかけた。そのとき、それまでよしくんが生きていた世界の中に、私という他者からのぶしつけな矢が唐突に射られたのである。もし、私の浅い解釈通りによしくんが本当に「ツリーチャイムを暖簾のように感じ、くぐろうとしていた」ならば、ふいに放たれた矢によって唐突に立ち上げられた自己であっても、「その通り！わかってくれた？」というよしくんの気持ちに届き、*empathy*（志向的な共感）の次元でのつながりが生まれていたかもしれない⁹⁾。

しかし、このときは、そうはならなかった。私の射った矢は、よしくんのφを無理やり刺激して立ち上げたものの、私とよしくんが別のところに立っていることだけを強調する結果となった。むしろ、よしくんからチラッと返されたまなざしによって、今度は私のφが鋭く射られてしまった。そうして急に自己意識を作動させられてしまった私は、一人で放り出されたような焦りの中で「きらきらぼし」を頼ってしまうことになる。

「くぐってみたん？」のときほどではないにせよ、「きらきらぼし」を弾くことによって、よしくんをツリーチャイムに引き留めてしまった、という私の「しまった」の感覚の出所も、同じように説明できる。「ツリーチャイムから離れようとしていた」というよしくんの自然な流れに対して、明確なフレーズを持つ音楽を奏でることによって、よしくんのタイミングとのズレを生んでしまった。

このときは、「きらきらぼし」の和声的輪郭を際立たせる、長三和音に基づく単純なコード進行を避けたこともあってか、結果として大きな問題にはならなかった。だが、もしここで「きらきらぼし」がよしくんのφを射抜くような明確な刺激になり、よしくんの自己を立ち上げるものになっていたとしたら、おそらく、「きらきらぼし」を弾く私と、そのことに気づくことをきっかけに立ち上がるよしくんの自己は、それぞれ別の世界に生成していたであろう。

先ほどから、異質な世界・別の世界に生成する自己や、別のところに立っている、などの表現を使ってきた。これは要するに、よしくんと私の自己が地続きではないところで生成している様子を表している。「地続き」とは、「『私』と『対象』という区分が未分化」である状態を指す言葉で、その「もっとも基本的なものが自他の地続き性である」と内海はいう（2015, pp. 117-118）。藤巻もまた、自他未分の世界への参入を「地べた意識」と呼ぶ。藤巻は、「『地べた』という表現には、実際に床（地べた）に下りるという物理的な意味と、事象が差異をもって立ち上がる以前の土台（地平）との同一化という象徴的な意味を込めている」（藤巻, 2020 p. 77）。自己生成を、「自己が立ち上がる」というイメージで捉えたとき、同時にその足場としての「地」が問題になるのである。

では、地続きのところから立ち上がる自己と、そうではないところで立ち上がる自己には、どのような違いがあるのだろうか。私はそれを、同じ大地に根を張り育つ植物なのか、別のプランターで育つ植物なのか、というイメージで捉えている。φが刺激され自己が立ち上がるとき、いくらはっきりとした反省的な自己意識を備えていようと、「くぐってみたん？」の場面のようなときは、それぞれが別のプランターで育つ植物のようなものとして生成することになる。互いによく見えるし、それぞれがそれなりにしっかりと育っているかもしれない。だが、根っここのところでは別の土を感じている。同じ大地の上に立つ自己とは、性質が異なるのである。同じ大地に立てたと感じられるときは、私というすでに社会的な個性化を果たした自己を通して、その先の社会へとつながりの可

能性を潜在させている、と考えられるのではないか。または、このようにも言えるかもしれない。それぞれが別のプランターの中で立ち上がる自己は、そのときその場の出来事に対応する1回限りのキャラのようなもので、次の自己生成の機会にはもう消えてしまっている。そのため、「この私」の自己として形成されていくことがないのである⁶⁾。ただし、社会的な個体化や、社会とのつながりが主たるテーマになるのはまだ先のことであり、ここでは、まずあくまでも「よしくと私」にとっての「地」についてまだ考えていかなければならない。

4.5. 大地を耕すことと、「共に居ること」—— 〈φ〉と〈アンテナ〉、そして音楽について

ここで紹介したよしくとのエピソードで私は、ぎこちなく音楽を奏でながら、よしくとにとって私にとっても、そこなら立てると感じられる大地を拓き、耕そうとしている。それは、「お互いが無理なく共に居ること」ができる状態を求めていることでもある。

当時、私はよしとくのことを「まだ存在自体がフワフワしているような、柔らかな繊細さを感じさせる雰囲気包まれている」ように感じていた。φの未形成に由来するよしとくの自己の輪郭の淡さ、被影響性の高さのようなものを感じていたということだ。そこで、まずはできる限りよしとくがその「フワフワ」のままで居られる状態を作ろうとしていた。ただし、私と共に、である。そのために、音楽が助けになる。たとえば、子どもの動きに寄り添うように音を出すと、自分がしている行為をなぞられていることにすぐ気がつき、それを面白がる子もいれば、逆に、ストーカーされているようで不快に感じる子もいる。ただ、このときのよしとくの場合は、そもそも私の音が耳に届いているのか、届いていたとして、それをどう感じているのかをつかむことが難しかったため、あまり成功していない。

自分の行為と音楽との関係に少しでも違和感を持っていそうだと感じれば、あえて演奏しながらよしとくと音楽との距離を離し、音楽は音楽と

して流れているだけです、と素知らぬふりをして演奏を続ける。逆に、特に邪魔になっていないようである、むしろ、音楽があることでスムーズな時間の流れを感じているようだ、と受け止められたときには、こちらも気兼ねなく演奏することができる。ただし、あまりに音楽にまかせっきりになると、本当のところはわからなくなる可能性も考慮しなければならない。「きらきらぼし」でよしとくをツリーチャイムに引き留めてしまったときのように、音楽は、場合によっては人の心身の状態に容易に作用しすぎるところがあるからである。

よしとくの〈φ〉に向けて、私は〈アンテナ〉を立て、音楽を発信する。そうして音楽に対する反応を感じながら、よしとくの〈φ〉の状態に関する情報を受信する。もっと近づいていいのか、もっと強くていいのか、もっとリズムカルにいくのか。テンポはどうか、など。そうして、音楽によって発信したことで得られる情報を受信し、受信した情報を次の瞬間の音楽に反映させてまた発信する。そのようにしながら連続的に音楽が流れていく。このような言い方では、よしとくと、音楽と、私の三者が、関係はしつづもすでに明確に分離したような存在だと思わせるかもしれない。しかし、どのような情報を受信するか、受信した情報をどのように感じるか、そしてそれをどのようにどの程度音楽に反映させるか、というところに、私という存在の個性や、よしとくと私とのオリジナルな関わりの積み重ねが影響している。そのため、ここからここまでは私の意図による音楽で、ここからここまではよしとくの影響による音楽で、などと切り分けて説明できるような存在の仕方はしていない。そうして、刻一刻と流れる音楽という時間の中で、お互いが無理なく共に居る状態がキープされると、互いの自己が立ち上がるためのひとつの大地が耕され、なじんだ関係になっていくことができる。そうして、なじんだ関係が重ねられていくと、以下のようなできごとが起こることがある。先のエピソードからおおよそ1年後の、よしとくとの24回目のセッションである。

静けさの中、トーンチャイムをそっと鳴らし、その丸みのある音の響きを、二人でじー…っと味わいます。そうして耳を澄ませていると、その残響の中から、おもしろさのようなものが滲み出てきて、我慢できなくなってしまう、二人して笑いを漏らすことがありました。また、たった一音の響きが、とても多くの情報量を含んでいるように感じられることもありました。よしくんも、長く続く余韻に、何か意味のようなものを感じていたのでしょうか。聴き終わった後に、「なんか言うてるな（何か言っているね）」と私に確認するかのようになり、話しかけてくることがありました。

(山本, 2021, p. 149)

よしくんが同じ大地に根ざすことで感じられた一音のおもしろさがきっかけとなり、互いの自己生成を確認し合えたことが窺える場面ではないだろうか。では、同じ大地に根ざすことと、一音のおもしろさ、そして自己生成は、どのように絡み合っているのだろうか。以下では、このトーンチャムの場面について振り返りつつ、一音を共に生きるという体験について吟味することから、この問いについて考えていく。

4.6. 一音を共に生きる

よしくんはこの日、いつもより静かに音楽療法の時間を過ごしていた。幼稚園で豆まきの行事があったそうで、少し疲れていたのかもしれない。2人で静かにしていると、エアコンの作動音が妙にうるさく感じられる。よしくんも気にしているようだったので「切る？」と尋ねると、「切る」と即答。そこで、まだ2月初旬の寒い日だったが、エアコンを消し静けさの中で過ごす心地よさを優先することにした。そのようなときに起こったのが、このトーンチャイムの場面である。

トーンチャイムは、手に持って振ると丸みを帯びた柔らかい音が鳴る楽器で、音が長く響き続けるという特徴がある。1オクターヴ（8音）のトーンチャイムを準備していたので、何か簡単な

メロディーを演奏することもできたが、このときは、静かにしていることが心地よい日だった。よしくんも私も余計なことはせず、一音をポーんと鳴らしては、その響きをしみじみと味わっていた。じっと耳を傾けていると、長く続く音の持続の中に、細かく動く音のゆらめき、ざわめきのようなものを感じることもある。音が、生き物のように感じられる。それが耳にこそばゆいような気がして、なんだかつい笑ってしまう。そんなとき、よしくんもそっと笑っていることに気がついた。それだけでも十分に親密な時間を過ごしているように感じられたが、よしくんはさらに、「なんか言うてるな（何か言っているね）」と、私に話しかけてくれた。それは私にとって、まさに言い得て妙な、共感しきりの感想だった。一音に耳を傾けることに浸っていたよしくんとは、その一言をきっかけに互いの目の前に改めて姿を現し、共に居たこと、今共に居ることを感じて嬉しくなった。一音を聴くという行為を共に生き、同じ大地を耕すうちに、その一音に滲み出たおもしろさを感じることで、ふとお互いの自己が立ち上がったのだろう。そして、よしくんの「なんか言うてるな（何か言っているね）」の一言によって、同じ大地に生きる自と他として出会うことの喜びを感じることもできた。

この場面が生まれた背景には、よしくんがなじんだ関係になるまでの、1年間の実践がある。静けさの中でお互いが無理なく共に居る、ということは、なじんだ関係がなければ実現しにくいのではないだろうか。特に ASD 者は、 ϕ の未形成ゆえに他者の志向性からの被影響性が高く、ふとしたことで「共に」の舞台となる大地から出て行ってしまうことがある。あわてて追いかけたり、呼び止めようとしても、さらに逃げられたり、傷つけたように感じてしまったりして、こちらも戸惑ってしまう。【何がおもしろいのかわからない】のエピソードで描いたのは、よしくんと共に居ることを実現する難しさであった。そして、そのときに音楽がいかにその実現を支えることができるかについて論じた。ただ、このトーンチャイムの場面では、先に論じたような音楽は登場していない。では、トーンチャイムの一音は、自己生成に

ってどのような役割を担っていたのだろうか。

4.7. 音や音楽が自己生成にどう働きかけるのか①——時間と空間を手がかりに

【何がおもしろいかわからない】のエピソードの頃、私はいつもアンテナを立ててよしくんのφの状態を受信することに力を注いでいた。受信したよしくんのφの状態に合わせ、微調整しながら音楽を発信することで距離感をはかり、お互いが無理なく共に居る時間をなんとか生成しようとする。そしてできるだけ、その時間をキープしようと試みていた。共に居る時間をキープすることは、よしくんがよしくんとして居続けることを支えることでもある。つまり、音楽という時間の流れを利用することによって、よしくんの自己の連続性に働きかけようとしていたと言い換えることができる。

それに対して、なじんだ関係を背景にして生まれたトーンチャイムの一音の場面は、むしろ、時間の流れをいったん忘れさせてくれるようなできごとであった。音の持続という時間の流れに伴うできごとであったにも関わらず、どちらかといえば、一音の響く空間の中に、時間を忘れて逗留することを味わう心地よさの方が印象に残っている。鳴り響く音に耳を済ませただその状態に浸っているとき、よしくんのφも、それに対する私のアンテナも、緊張をゆるめ、やわらかく弛緩することができていたのではないだろうか。身体的にも、じっと座って動かず、無理なく共に、ここに居る。一音を聴くという行為の場としてのここを感じることは、空間の中で、座標軸上に安定した自己の居場所を指し示し、時間的な連続性とはまた違った形で、自己の感覚を支えることでもあったのではないだろうか。

4.8. 音や音楽が自己生成にどう働きかけるのか②——empathyとsympathyを手がかりに

さらに、このときの一音は、ASDの自己生成を考える上で、もう一つ特徴をもつ。一音の響きは、感情的な回路を介さずにそれに浸ることができるものである、という点である。内海(2015)

は、視線触発を経由した後に対人関係の基軸となる empathy (「こころ」を介した共感) は ASD では困難な課題であり、sympathy (「こころ」を経ないで成立する地続き的な共感) が ASD にとって豊かなリソースとなりうるという (p. 65)。ただし、sympathy による関わりが、ASD の自己生成をいかなる意味で支えるのかという点について内海は触れておらず、sympathy による感覚的な才能が発揮されることで、芸術や料理などが有望な領域となるかもしれない、などと述べるにとどまっている。そして、こころをオフラインにして花や葉を見入るグニラ・ガーランドや、茶箱に入ったレースやボタンを見つめたり混ぜ合わせたりすることで自由な解放感に浸ることができるというドナ・ウィリアムズを例に挙げ、「自己というものを一時的に解除すること」が、感覚を賦活化して ASD 者に安心感を与えるという (p. 280)。しかし、ASD 者にとっての sympathy の意味をそのように理解するだけでは、どこかさみしくはないだろうか。こころを介した複雑な人間関係に疲れたことのある人ならば、ASD でなくとも、こころをオフラインにして感覚に浸る時間の尊さは理解できるだろう。私は、花や葉を見入るグニラ、茶箱と戯れるドナの邪魔をしないわけではない。ただ、こころをオフラインにして感覚的なものに浸るということを、「誰かと共に」体験することもできるのではないだろうか。その体験は、トーンチャイムの場面のように、ASD の自己生成につながることはあるのではないだろうか。グニラが花を見つめるとき、隣で同じように花に見入る誰かが、ドナが茶箱と戯れるとき、隣で同じように茶箱の中のレースやボタンの美しさに没頭する誰かが居たら、どうだっただろうか。ここでいう「誰かと共に」は、そこに何らかの意味や感情を生むものでなくてもよく、ひとまず、「ただ誰かと共に居る」ことができればよい。しかしおそらく、誰でもいいわけではない。お互いにそこなら立てると感じる大地を耕すことを通して生まれた、なじんだ関係を背景にした他者でなければいけないだろう。トーンチャイムの場面では、一音に対する sympathy がもとになって、そのおもしろさに共感し合い、よしくんと私は empathy の次元で

もつながることができた。empathy は志向的な共感であるために、互いにとつての「志向の発信元」であり、「志向先」であるという意味で、自己他存在の分離が体験され、自己生成が誘われる。自らが立つ大地が他者と共有されているという、同じ大地に立つ体験を繰り返すことで、未形成な ϕ であっても、その人なりの安定した状態に向けて頼もしく変容していくのではないだろうか。

5. ま と め

—— ASD の自己生成に立ち会うために

5.1. ASD の自己生成に立ち会う他者になるために、自己の輪郭をゆるめる

ϕ の未形成に由来する ASD の自己の弱さは、 ϕ の未形成ゆえの、「誰かと共に居る」という体験の少なさによって、循環的に障害されている。ここで紹介した音楽療法は、お互いがそこなら立てると感じられるような自他の足場としての大地を耕し、そこに根ざした ASD の自己生成を期待する営みであった。その際、音楽は ϕ という志向性のレセプターの状態に合わせて無理なく共に居ることを実現する手がかりとなっていた。最初のエピソードの場面で私は、よしくんがそれまでいた「地」と地続きであろうと試みていた。そのためには、私はいったん私の自己の「いつもの地」から離れなければならない。それは私自身が、自己の輪郭をゆるめることを意味する。「くぐってみたん？」という私の発言に対するよしくんからのまなざしが、射られたと感じるほど私に突き刺さったのは、私の自己の足元が、よしくんと共に立てる大地を探してふらついていたからなのではないだろうか。自他未分の ASD と地続きになるということは、「普段の自分の感じ方を括弧に入れて、ASD 者が何を感じているかを共に感じる」というような水準の話ではない。もちろん、ASD 者が何に興味があり、何に関心を向けているかがわかれば、関わりの手助けになるだろう。しかし、括弧に入れるのは、「自分の感じ方」ではない。やや極論になるかもしれないが、「自分の感じ方」と言ってしまうような、自分のいつもの「この私の感覚」の方をこそ、括弧に入れるのである。そ

うすることで初めて、同じ大地の上での自己生成に立ち会う可能性が開かれるのではないだろうか。

5.2. 今後の課題

内海は、「経験世界を構造化する他者」と、「すでに構造化された世界に登場する他者」を区別し、ASD には、構造化する他者が訪れてこないという（内海, 2015, pp. 57-58）。 ϕ を巡って登場する他者は、「この私」を指し示す痕跡を残すが、「気づいたときには立ち去っている」という、超越論的な他者である。この他者が訪れないと、経験世界が構造化されないという。しかしおそらく実際には、ASD の ϕ は、ないのではなく未形成なのであり、それまでの人生における他者経験の中で、それぞれの形で世界を構造化しているはずである。私がここで論じたかったのは、現実の具体的な他者として ASD の自己生成に立ち会うにも関わらず、ASD の経験世界の構造化にも関わり得るという、二重の他者の可能性であったといえる。そのように考えることで、ASD 者との共生について、他人事ではなく、自分事として捉える視点が開かれるのではないだろうか。

今後の課題として、その二重の他者について、「他者」を「他者一般」として定数化するのではなく、「変数化した他者論」（千葉他, 2020）として論じられるべきである、とする説や、國分（2019）の「類似的他者論」を手がかりに、ASD の自己生成に立ち会う他者について、さらに考察を進めていきたいと考えている。

註

- 1) 本稿では、内容上、「ASD 者」と記載することによって文意が伝わりやすくなる箇所、「ASD 幼児」であることを示した方がエピソードをイメージしやすいと思われる箇所を除き、自閉スペクトラム症・自閉スペクトラム症児者の両方を指して、「ASD」と記載している。
- 2) ここでの「自己性」は、その子の自分らしさや、その子の心のありようを指す。本稿は、「自己性」が形成されるために、自己生成の瞬間を繰り返し経験することが必要なのではないかと、という立場で考察を展開する。
- 3) 山松賢文〔1913-2005〕は、日本の音楽療法の先駆者の一人として、1950年代から音楽療法の実践に携わった。京都大学文学博士。大阪市立大

- 学・追手門学院大学名誉教授。人間性心理学に基づき来談者中心療法を創始したC. ロジャーズ [1902-1987] の考えに影響を受け、ASDの心理療法に音楽を取り入れたことで知られる。クライアントの気分や気持ちのテンポを受容し、それに合った音楽を使用することを手がかりに、クライアントの自己表現を支えること、そのクライアントの表現に触れたときの感動を音楽療法士が積極的に表現することを通し、「究極的には、好ましい人間関係の形成をめざすひとつの創作活動」として音楽療法を捉えようとした(山松, 1997, p. 133).
- 4) ここでいう「シンプルなコード進行」というのは、たとえばハ長調では、C-C-F-C-G-C-G-C…のように主要三和音のみを用い、根音をベースにするような単純明快な伴奏のことを指す。それに対して、「おぼろげに続くような伴奏」というのはCM7-Em7-FM7-Em7-Dm7-Em7-Dm7…のように、セブンスコードを連続させることにより、属和音-主和音(ドミナントトニック)がもたらす緊張-弛緩を排除し、和声的な輪郭を曖昧にして弾いていたことを指す。「きらきらぼし」という曲が唐突に登場したことにあまり注目が集まらないよう、さりげなく場の背景に流れることを期待したために、このような演奏になった。
- 5) Frith (2003/2009) は、いわゆる「こころ」を経由して成立する、志向的な共感のことを、*empathy* と呼び、「こころ」を経由しないで成立する、本能的な共感や共振、つまり「地続き的な共感」については、*sympathy* と呼んでいる。
- 6) では、同じ大地の上での自己生成であれば、自己の形成につながるのだろうか。「地続き」であることが、なぜ「二」を生み出す力を持つのか。藤巻は、「地べた意識」のプレイセラピーで生じる「一」とも「二」とも言えない矛盾に満ちた状況を、「響き合う一なる世界」と表現している。これは、地続きの「一なる世界」の内側に「二」の萌芽が含まれていることを意味する。さらに藤巻は、この矛盾の持つ力を、セラピーにおける中動的なコミットメントという視点と併せて捉え直すことで、治療機序としての積極的な力動となるのではないかと考えている(藤巻, 2020, pp. 192-201).
- 文献
- 青木省三・村上伸治編著 (2015). 大人の発達障害を診るということ——診断や対応に迷う症例から考える. 医学書院
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎 (2008). 発達障害当事者研究——ゆっくり丁寧につながりたい. 医学書院, p. 110
- 綾屋紗月 (2010). つながりの作法——同じでもなく違うでもなく. NHK 出版, p. 18
- Frith, U. (1989). *Autism: Explaining the Enigma* (1991. 富田真紀・清水康夫訳, 自閉症の謎を解き明かす, 東京書籍)
- Frith, U. (2003). *Autism: Explaining the Enigma*, 2nd Edition (2009. 富田真紀・清水康夫・鈴木玲子訳, 新訂 自閉症の謎を解き明かす, 東京書籍)
- 藤巻るり (2020). 発達障害児のプレイセラピー: 未分化な体験世界への共感からはじまるセラピー (箱庭療法学モノグラフ第11巻), 創元社, p. 45, 77-78, 133, 192-202
- Gerland, G. (1997). *A Real Person: Life on the outside*. (2000. ニキ・リンコ訳, ずっと「普通」になりたかった, 花風社)
- 平野啓一郎 (2012). 私とは何か——「個人」から「分人」へ, 講談社現代新書
- 広沢正孝 (2013). 「こころの構造」からみた精神病理——広汎性発達障害と統合失調症をめぐる, 岩崎学術出版社
- 木村敏 (2005). あいだ, ちくま学芸文庫
- 木村敏・市川浩・柄谷行人・中井久夫 (2017). 〈分裂病〉をめぐる——固有名の欠如・不成立, 臨床哲学対話 あいだの哲学——木村敏対談集2—, 青土社, p. 311
- 國分功一郎 (2019). 類似的他者——ドゥルーズの想像力と自閉症の問題, 檜垣立哉/小泉義之/合田正人編, ドゥルーズの21世紀, 河出書房新社, pp. 143-166
- 國分功一郎・熊谷晋一郎 (2020). 〈責任〉の生成——中動態と当事者研究, 新曜社
- 後藤浩子 (2007). 音楽療法の草分け山松質文が残したのもの, 大阪音楽大学研究紀要, 第46号, pp. 91-108
- 鯨岡峻 (1999). 関係発達論の構築——間主観的アプローチによる, ミネルヴァ書房, p. 105
- 鯨岡峻 (2005). エピソード記述入門——実践と質的研究のために, 東京大学出版会
- 鯨岡峻 (2013). なぜエピソード記述なのか——「接面」の心理学のために, 東京大学出版会
- 村上靖彦 (2008). 自閉症の現象学, 勁草書房
- 能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦編 (2018). 質的心理学辞典, 新曜社
- Stern, D. N. (1985). *The Interpersonal World of the Infant*. (1989. 小此木啓吾・丸太俊彦, 監訳, 神庭靖子・神庭重信訳, 乳児の対人世界: 理論編, 岩崎学術出版社)
- 千葉雅也・國分功一郎・村上靖彦・熊谷晋一郎・松本卓也 (2020). [座談会] ロビンソン・クルーソーは無人島で誰に最初に出会うのか——統合失調症から自閉症へ, 精神看護 (23), 1, pp. 36-53
- 内海健 (2012). さまよえる自己——ポストモダンの精神病理, 筑摩選書, pp. 40-41
- 内海健 (2015). 自閉症スペクトラムの精神病理: 星をつぐ人たちのために, 医学書院, p. 5, 46, 53, 57-58, 117-118
- Williams, D. (1992). *Nobody Nowhere*. (2000. 河野万里子訳, 自閉症だったわたしへ, 新潮文庫)
- Williams, D. (1998). *Autism and sensing: The unlost*

- instinct. (2009). 川手鷹彦訳, 自閉症という体験——失われた感覚を持つ人びと, 誠信書房)
- 山松質文 (1997). 音楽療法へのアプローチ——ひとりのサイコセラピストの立場から, 音楽之友社
- 山本知香 (2016a). ある自閉症の子どもと音楽療法士の〈出会い〉の考察——音楽の中で自己が析出するとき, アートミーケア学会オンラインジャーナル, vol. 7, pp. 51-67
- 山本知香 (2016b). 「出会うということ」をめぐって——ある自閉症の子どもと音楽療法士の〈あいだ〉に着目して——, 質的心理学フォーラム, vol. 8, pp. 14-22
- 山本知香 (2021). 自閉スペクトラム症の子どもとの音楽療法における音・音楽と接面——自己性の育ちへのアプローチ, 鯨岡峻・大倉得史編, 接面を生きる人間学——共に生きるとはどういうことか——, ミネルヴァ書房, pp. 131-158
- 山本知香 (2023). 関係発達論的な音楽療法実践の理論的背景——滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター「おとさぼ」における音楽療法をもとに, 滋賀大学教育実践研究論集, (5), pp. 119-125
- 山崎徳子 (2015). 自閉症のある子どもの関係発達——「育てる-育てられる」という枠組みでの自己感の形成, ミネルヴァ書房, p. 230

Considerations on others present in the self-generation of autistic spectrum disorders

Chika YAMAMOTO

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary The purpose of this paper is to examine others who is involved in the self-generation of autism spectrum disorder (ASD) in the context of music therapy practice. In order to witness self-generation, it is necessary to live together in the self and other undivided world of ASD. However, it has not been clear how the weakness of the ASD self affects both the generation of self from an undivided world and the way in which others are. Therefore, we referred to the concept of “ ϕ ”, which is a receptor of orientation from others, and considered practical situations. As a result, it is important for the self and others to stand on the same “ground” for self-generation to occur, that the transmission of music toward “ ϕ ” can help in this regard, and that those involved as others need to loosen the contours of the self.